

社会言語学的多人数調査から見る札幌市の方言アクセント衰退の遅速

—2拍名詞第Ⅱ類に注目して—

尾崎 喜光

はじめに

北海道のアクセント、とりわけ内陸部で行われているアクセントは、下げ核を弁別の特徴とする点やアクセント型の種類・数において、東京ないしは共通語のそれと同じである。

しかしながらその対応関係は一部異なる。2拍名詞（和語）について、共通語アクセント（東京式アクセント）と、北海道およびその基盤となった東北北部の伝統的アクセントとの対応関係を、石垣（1983）・小野（2001）等にもとづき作成した尾崎（2014）を引用して示すと次のとおりである。なお、括弧内は1拍の助詞である。

2拍名詞（和語）の伝統的アクセントの地域間対応

	第Ⅰ類	第Ⅱ類	第Ⅲ類	第Ⅳ類	第Ⅴ類
東京	LH(H)	LH(L)		HL	
北海道・東北北部	LH(H)		LH(L)	HL	

東京と比較しての異なりは2点ある。

一つは第Ⅱ類である。東京では第Ⅲ類と統合して LH(L)となるのに対し、北海道では第Ⅰ類と統合して LH(H)となる。たとえば「橋(が)」「紙(が)」などは LH(L)ではなく LH(H)となる。

もう一つは第Ⅳ類・第Ⅴ類である。北海道では2拍目の母音の広狭により2系列に分かれる。このうち2拍目が広母音（a、e、o）であるもの（第Ⅳ類 w・第Ⅴ類 w）でアクセント型が異なる。北海道ではこれらは第Ⅲ類と統合して LH(L)となる。たとえば「肩(が)」「種(が)」などは HL ではなく LH(L)となる。

北海道においても方言の共通語化（方言形の使用割合の減少および共通語形の使用割合の増加）が以前から進行しているが、これはアクセントについても該当する。たとえば尾崎（1987・1989）は、1985年に札幌市ネイティブを無作為抽出多人数調査した結果を報告しているが、方言アクセントから共通語アクセントへの置き換えが年齢層による違いとして明確に現われている。

上記の対応表を参照すると、共通語化が見られる可能性があるのは第Ⅱ類と第Ⅳ類 w・第Ⅴ類 w であることがわかる。調査してみると、年齢層による違いとして確かにいずれも共通語化が観察されるが、その進行の度合いは、第Ⅱ類と第Ⅳ類 w・第Ⅴ類 w とで大きく異なる。

2011-12年に朝日祥之氏（国立国語研究所・教授）との共同研究として行なった札幌市での無作為抽出多人数調査によると、方言アクセントの使用率は、第Ⅳ類 w・第Ⅴ類 w は図 1-1、第Ⅱ類は図 1-2 のとおりである。前者は「種」「雨」「窓」「糸」「肩」「鮎」の6語について、後者は「歌」「音」「紙」「橋」の4語について、1拍の助詞を付けた短文を読み上げてもらう方法で発話してもらった。聞き取りは筆者が行なった。

いずれも若年層になるに従い方言アクセントの数値はほぼ一貫して低下する点は共通するが、前者はグラフの線が比較的まとまっているのに対し、後者は、早い段階で数値が低くなっているグループと、若年層になっても数値がある程度維持されているグループとに二極化しているように見える。

小論では第Ⅱ類のこの点に着目し、その要因等について考察する。

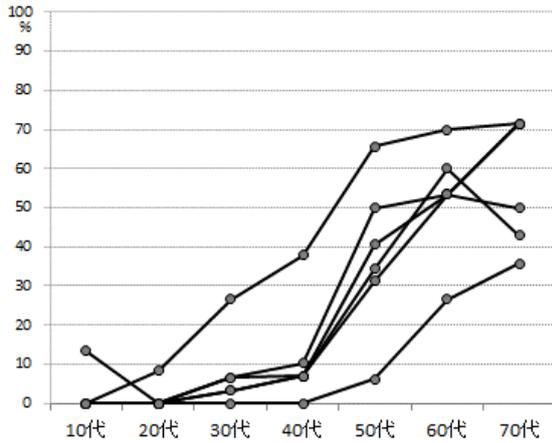


図 1-1 第IV類_w・第V類_wの方言アクセント「LH (L)」の使用率 (2011-12 年調査)

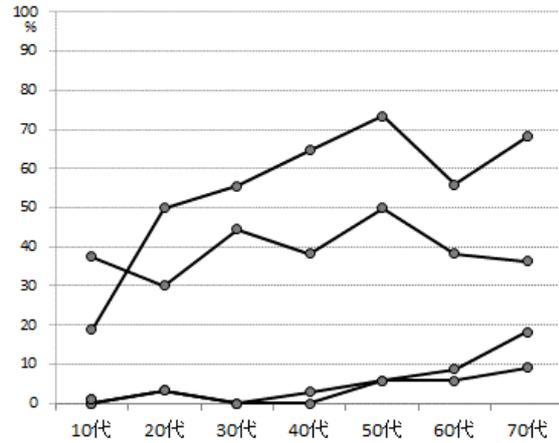


図 1-2 第II類の方言アクセント「LH (H)」の使用率 (2011-12 年調査)

1. 調査概要

小論では、札幌市における次の2つの社会言語学的調査で得られたデータを分析する。

調査 1：1987 年実施の札幌調査

方言の共通語化の実態把握を中心的な研究課題として国立国語研究所が 1987 年に札幌市で実施した無作為抽出多人数調査である。回答者は 10 代（後半）～60 代の男女 350 人である。この調査録音資料がデジタル化されて国立国語研究所に保存されていることから、利用許可を得て国立国語研究所内で筆者が 2024 年に全員のアクセント（ただし一部のアクセント項目）の聞き取りを行なった^(注1)。

小稿で論じるのは、調査 2 と重なる「歌」「音」「紙」「橋」の他、「胸」「冬」である。回答者には、これらを含む下記の短文を読み上げてもらった。他の調査語を含め助詞は「も」で統一されている。

「歌もうたった。」「音も聞こえた。」「紙も買った。」「橋も見えた。」
「胸も痛い。」「冬も来た。」

調査 2：2011-12 年実施の札幌調査

調査 1 から 20 数年が経過した 2011-12 年に、札幌市におけるこの間の実時間変化を把握するための無作為抽出多人数調査を、朝日祥之氏（国立国語研究所・教授）との共同研究として実施した^(注2)。回答者は 10 代（後半）～70 代の男女 206 人である。実査は調査会社に委託し、納品された録音資料の聞き取りを筆者が行なった。

調査語は「歌」「音」「紙」「橋」である。これらを含む下記の短文を読み上げてもらった。

「歌を集めた。」「音が弱い。」「紙が薄い。」「橋が流れた。」

2. 結果と分析

2.1. 1987 年の札幌調査（調査 1）

1987 年調査の結果は図 2-1～図 2-6 のとおりである。なお小論では、年齢層や生年層に現われる方言アクセントの推移に焦点を当てるが、調査時点での実態記録という資料的価値を残すこともめざし、それ以外のアクセントも含めて示す。アクセントは、語頭では典型的に「LHH」になるものを①、「LHL」となるものを②、「HLL」となるものを③で示した。

凡例およびグラフ中の数値を強調して示した方言アクセント①に注目して年齢層別の箇所を見ると、「音」「胸」は若年層になるに従い数値が明確に低下する。このことは、年齢層と連動する回答者の生年層別の数値（上が和暦、下が西暦）にも見られる。「歌」は、①の数値が小さいため年齢層別の違い



図 2-1 「歌も」のアクセント (1987 年調査)

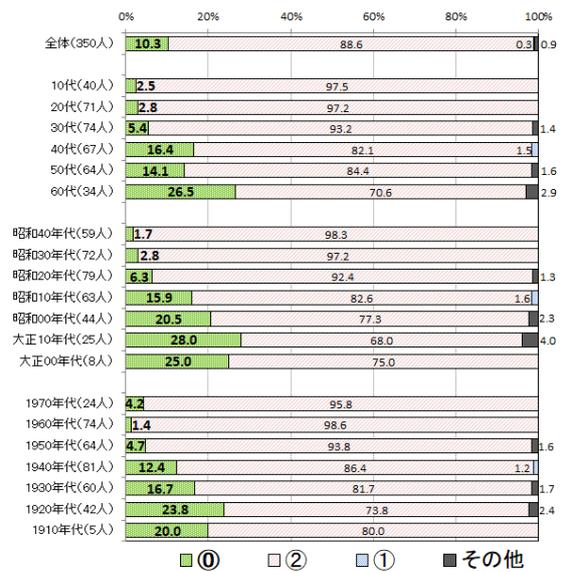


図 2-2 「音も」のアクセント (1987 年調査)

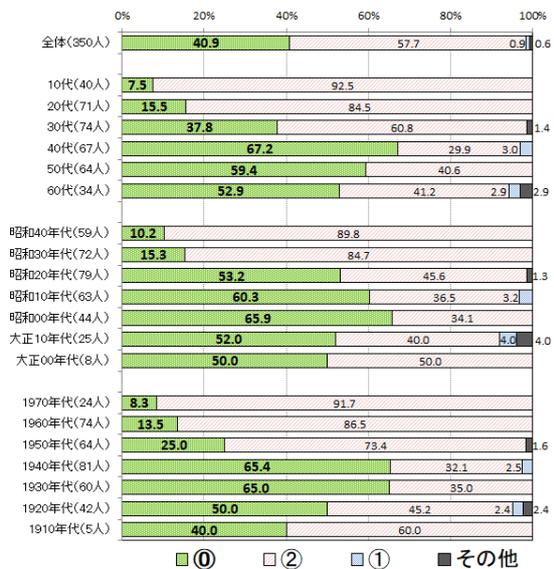


図 2-3 「胸も」のアクセント (1987 年調査)

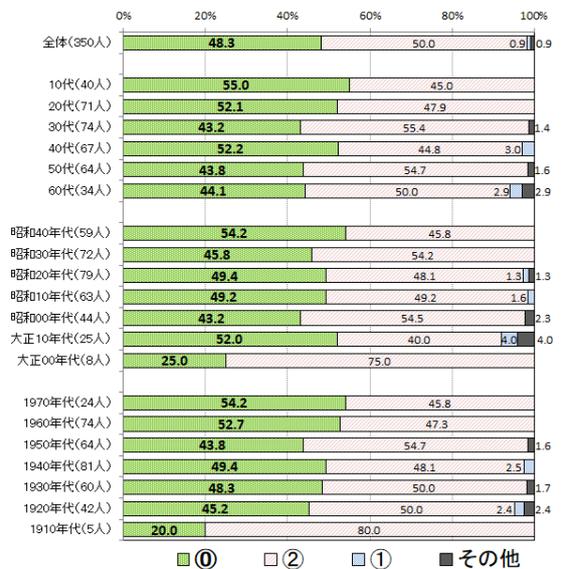


図 2-4 「紙も」のアクセント (1987 年調査)

は明確に見られないが、生年層別に見ると「音」「胸」と同様の傾向が認められる。すなわち「歌」「音」「胸」の3語は、方言アクセント①の衰退が明確に見られるという共通点が確認できる。

これに対しグラフ後半の「紙」「橋」「冬」の3語には方言アクセント①の衰退が明確には認められず、若年層においてもかなりの程度①が保たれているという点で共通しており、かつ前半の3語との違いともなっている。

すなわち、ともに第Ⅱ類に所属しているものの、方言アクセント①の衰退が早くまたそれが年齢差・生年層差として明確に現われる「歌」「音」「胸」と、その衰退が遅くまたそれが年齢差・生年層差として明確には現われない「紙」「橋」「冬」という2つのグループに分かれるようである。

これら6語の①の数値を1つのグラフに集約したのが図 2-7 である。点線は衰退が明確に認められる「歌」「音」「胸」、実線はそれが認められない「紙」「橋」「冬」である。上記で指摘した2つのグループの傾向の違いが改めて明確に確認できる。

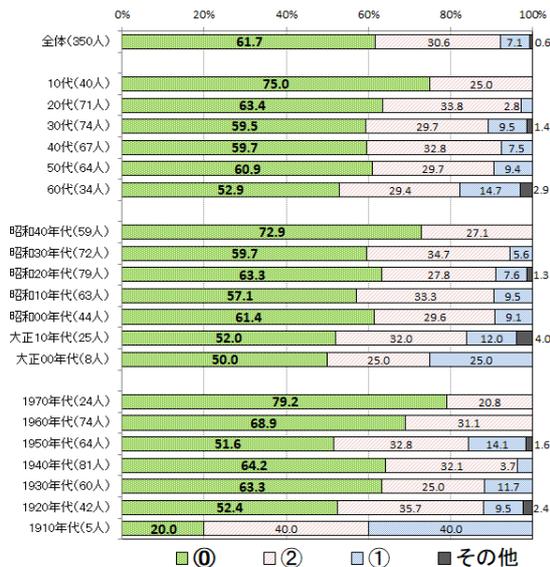


図 2-5 「橋も」のアクセント (1987 年調査)

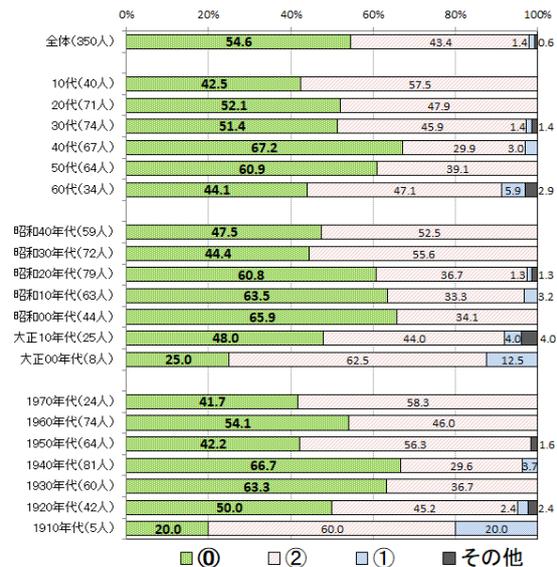


図 2-6 「冬も」のアクセント (1987 年調査)

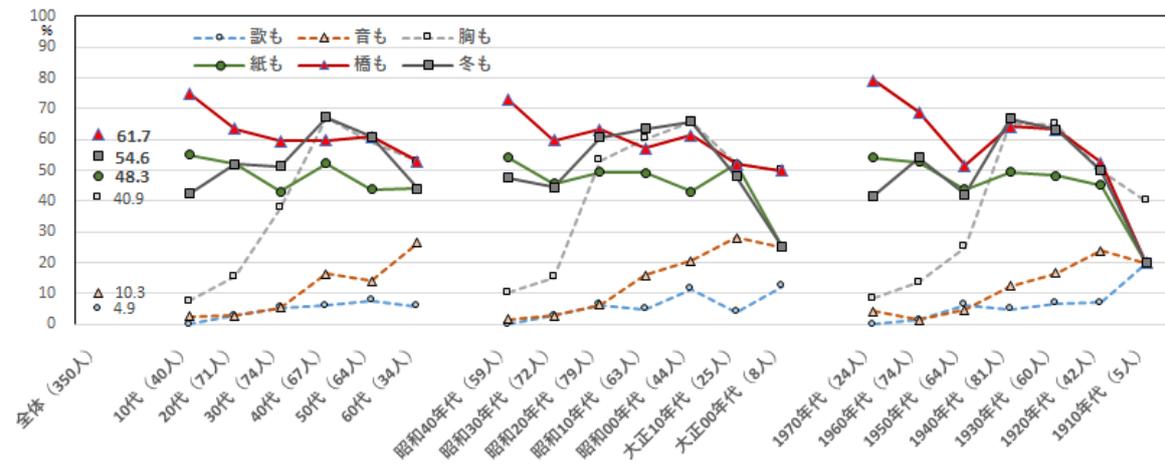


図 2-7 方言アクセント①の使用者率 (1987 年調査)

2.2. 2011-12 年の札幌調査 (調査 2)

この調査から 20 数年が経過した 2011-12 年に、6 語のうち「歌」「音」「紙」「橋」の 4 語をほぼ同様に調査した結果は図 3-1～図 3-4 のとおりである。「歌」「音」が先ほどの最初のグループ、「紙」「橋」が後のグループである。

20 数年経過すると共通語化が進み、方言アクセント①の数値は減少する。特に 1987 年調査で衰退が先行し、それが年齢層差等にも明確に認められた最初のグループである「歌」「音」の①の数値は数パーセントにまで衰退する。そのため年齢層等による違いも微弱に認められる程度にとどまる。

これに対し衰退が明確には認められなかった後のグループである「紙」「橋」は、20 数年経過した 2011-12 年になると共通語化が加速する状況になったためか、「橋」には年齢層差・生年層差が認められるようになる。「紙」も、年齢層差は明確には認められないが、生年層差はある程度認められる。このように、2011-12 年になると、①の衰退という動態が認められるようになるが、その数値は先の「歌」「音」と大きく異なりいまだ大幅に高く、この点において両グループの違いは維持されている。

これら 4 語の①の数値を集約して示したのが図 3-5 である。点線は衰退が先行する「歌」「音」、実線は衰退が遅い「紙」「橋」である。上記で指摘した 2 つのグループの傾向の違いが改めて明確に確認される。

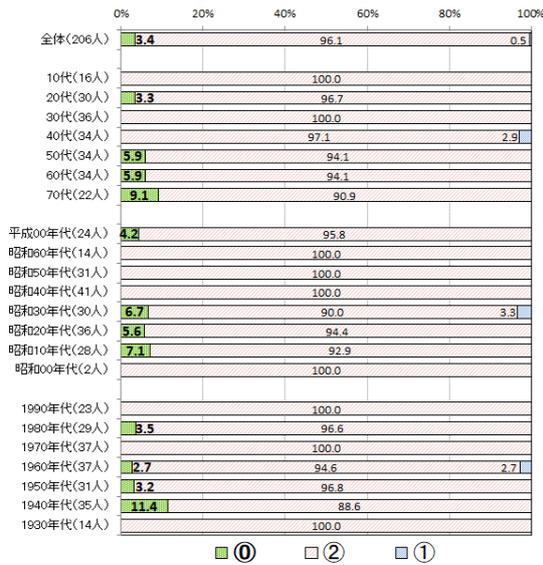


図 3-1 「歌を」のアクセント (2011-12 年調査)

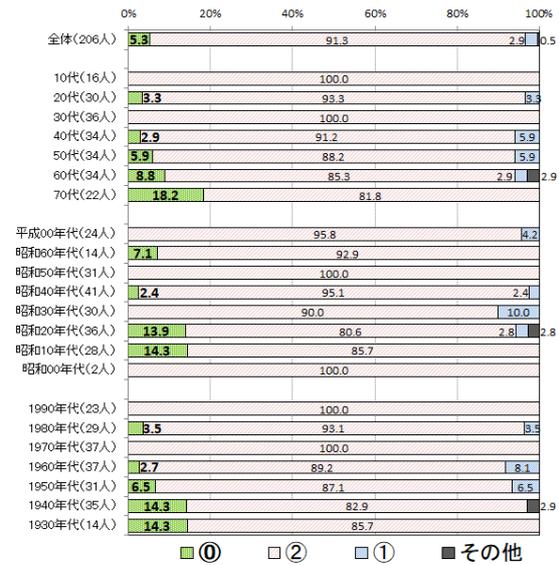


図 3-2 「音が」のアクセント (2011-12 年調査)

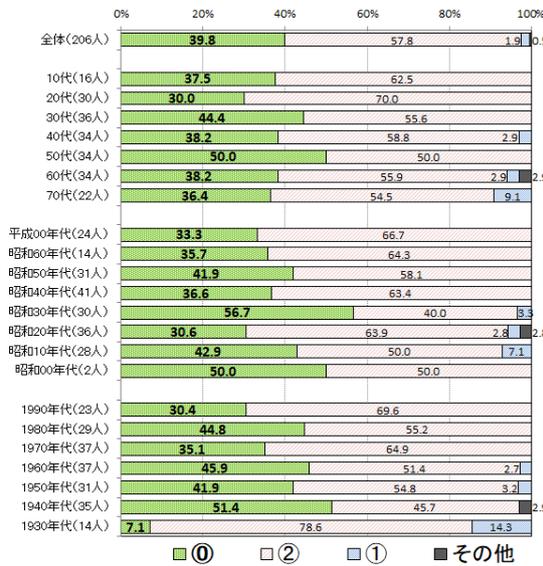


図 3-3 「紙が」のアクセント (2011-12 年調査)

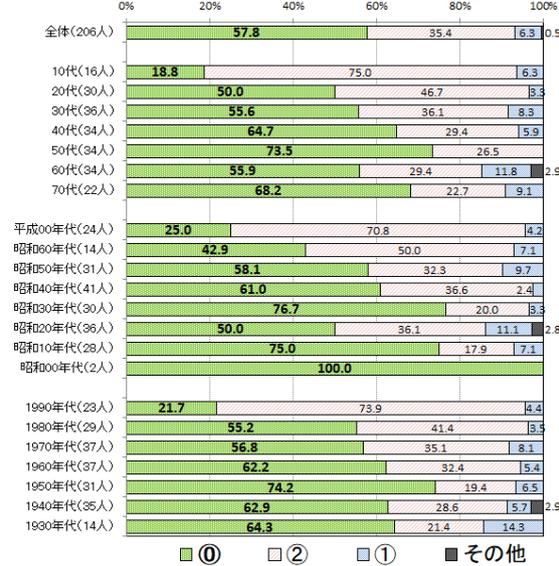


図 3-4 「橋が」のアクセント (2011-12 年調査)

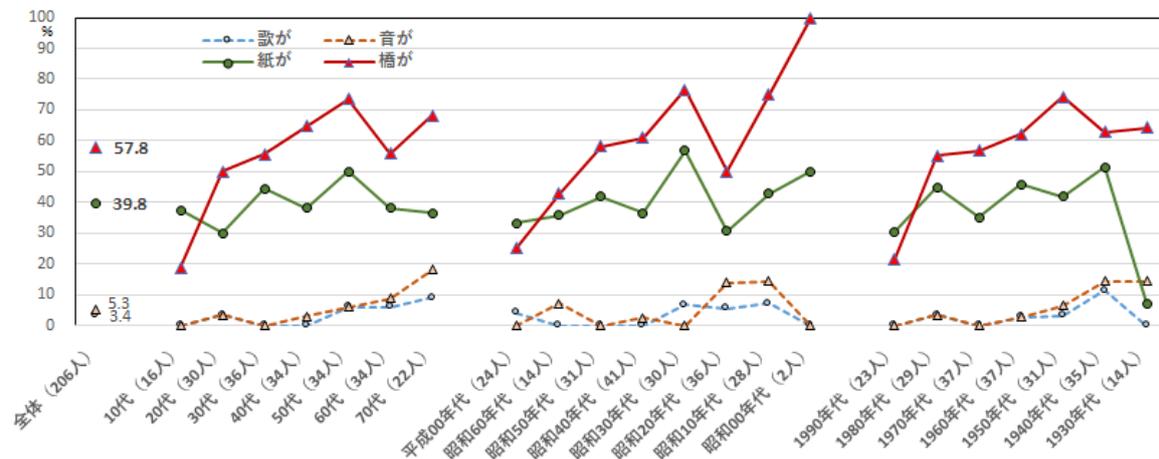


図 3-5 方言アクセント①の使用率 (2011-12 年調査)

こうした2つのグループの違いは、1987年調査にも2011-12年調査にも認められた。

方言アクセント①の数値について両調査を比較しやすい形に組み替えたのが図4-1～図4-4である。

図4-1の「歌」の方言アクセント①は、1987年調査の時点からきわめて低いが、2011-12年調査でも同様である。数値の変化もほとんどない。年齢層別に見ても2つの線はほぼ重なる。その右側の生年層別(2種)のグラフもほぼ同様である。両調査で重なる生年層を比較すると、コーホート(同時期出生集団)の数値に大きな変化はない。同一個人に対する追跡調査ではないため推測にとどまるが、この結果は、関連する調査の分析である尾崎(2014)で指摘した第IV類w・第V類wと同様、20数年経過しても個人内ではアンケートが安定している人が多いことを示唆していると考えられる。

図4-2は同様に「音」の方言アクセント①を示したものである。いずれの調査でも数値は低い。ただし数値はこの間にさらに低下する。年齢層別に見ると、1987年の時点である程度数値が高かった40代以上の低下が大きい。コーホートで比較すると変化は小さい。

このように、「歌」「音」は、1987年調査でも2011-12年調査でも、方言アクセント①の数値はきわめて低いこと、逆に言えば共通語アクセント②がすでにきわめて優勢であることが確認できる。

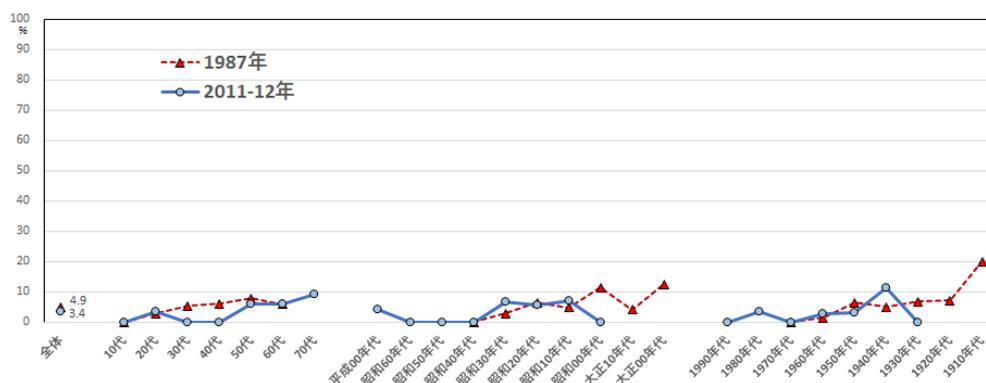


図4-1 「歌も/歌が」の方言アクセント①の使用者率の実時間変化

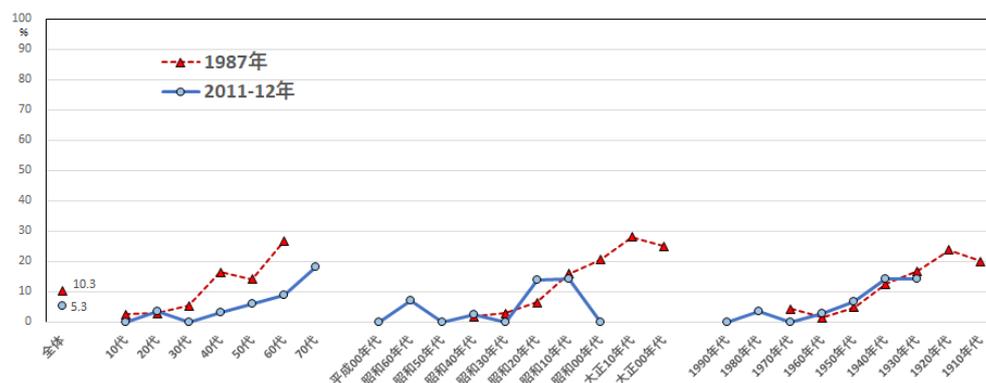


図4-2 「音も/音が」の方言アクセント①の使用者率の実時間変化

図4-3は「紙」の方言アクセント①である。先に見た「歌」「音」と異なり、いずれの調査でも数値は高めである。ただし数値はこの間に低下している。年齢層別に見ると、20代以下で大幅な低下が見られる。コーホートで比較すると、20数年経過して増加が見られる箇所も一部あるが、全体的にはほぼ同じないしは低下が見られる。

図4-4は「橋」の方言アクセント①である。先に見た「紙」と同様、いずれの調査でも数値は高めである。年齢層別、コーホート別では安定性が低い。同音異義語「箸」の影響を受けたためか、そのアクセントである①も少なくないこと(図2-5、図3-4)がそれに関与しているのかもしれない。

このように、「紙」「橋」は、1987年調査でも2011-12年調査でも方言アクセント①は一定の勢力を

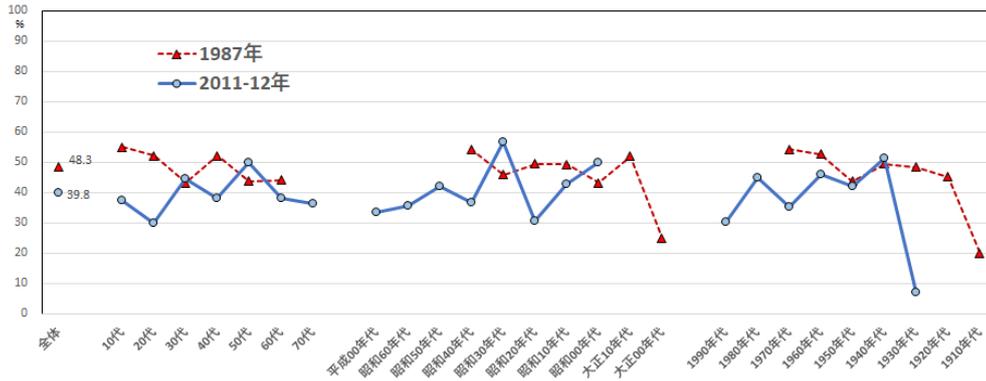


図 4-3 「紙も／紙が」の方言アクセント⑩の使用者率の実時間変化

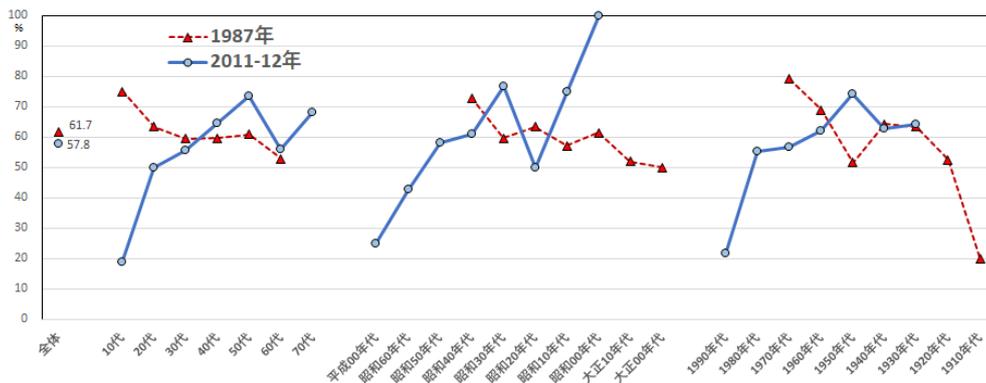


図 4-4 「橋も／橋が」の方言アクセント⑩の使用者率の実時間変化

持っている点で共通しており、かつ数値がきわめて低い状態が維持されている「歌」「音」と異なることがわかる。すなわち、「紙」「橋」のグループと「歌」「音」のグループに分かれるという特徴は1987年調査の時点で見られ、それは2011-12年調査の時点でも継続されていることが確認できる。

3. 考察

第Ⅱ類の方言アクセント⑩の衰退の進度が2つのグループに分かれるという小論の指摘については、1960年代後半から北海道各地の言葉を調査した小野（1993）にも以下のように見られる。

小論で紹介した調査のうち、1987年調査と同じ札幌市のデータを分析したところ、「歌」「音」「胸」など2拍目の母音が広いものの場合に次第に②へと移行し（＝方言アクセント⑩が衰退し）、それが狭いものも②へと変化してきたようであると指摘する。なお、この調査の報告（中間報告）は国立国語研究所（1997）でなされているが、第Ⅱ類についての分析はないことから、報告書にはない集計資料を参照する、ないしはオフィシャルデータとは別に自身で録音資料の聞き取り・分析を行なって得た結果であるのかもしれない。小論で指摘した1987年調査のこの傾向の違いは、じつはずでに指摘されていたが、別の者（筆者）が聞き取りをしても同様の結果が得られること、またこうした傾向の違いは2011-12年までも続いていることを小論で明らかにした。

北海道での初期の調査として、旭川市で1968年に実施したものがある。旭川市の青年層（北海道三世の大学生と中学生）を調査したところ、第Ⅱ類ではなく第Ⅰ類に関する説明であるが、これらを東京と同様に⑩で発音する語が多いものの、語末母音が広い「魚」「里」「布」は②に、それが狭い「雉子」「鈴」は⑩のほか①にも発音されることから、末尾母音の広狭による傾向の芽生えがうかがわれるとする。ただし第Ⅱ類についての同様の言及はない。第Ⅰ類と第Ⅱ類の区別は、北海道ではもともと基本的になかったと思われることから、小論で確認した⑩から②への変化に語末（2拍目）の母音の広狭が関与していることは、少なくともこの時期の若年層にその萌芽が見られたということになる。

第Ⅱ類の2拍目の母音の広狭が共通語化や方言アクセントの保持の進度に傾向的に関与していることについては、北海道の海岸地方にも見られる。積丹半島東海岸の古平町で14～62歳の22人を1985年に調査したところ、第Ⅱ類の多くは①で発音されるが、「型」「紙」「川」「胸」などは30代以下では②で発音する傾向が見られるとする。特に言及はないが、語末母音が広いもので多いということなのかもしれない。また、函館市で1987年に調査したところ、第Ⅱ類はほぼ①であったが、特に2拍目の母音が広いものを中心に、おもに20代以下の若年層で②に変化する傾向がみられるとする。

このように、第Ⅱ類の①から②への変化（共通語化）には、少なくとも半世紀ほど前から、内陸部・海岸部を問わず、比較的進捗の早い語とそれが遅い語との2グループに分かれること、その違いは第2拍の母音の広狭にもとづくこと、すなわちそれが広母音（a・e・o）の場合は②への変化が早い（＝方言アクセント①の衰退が早い）のに対し、それが狭母音（i・u）の場合は②への変化が遅い（＝方言アクセント①の衰退は遅く保持されやすい）という違いがあること、そしてその傾向は今から10数年前の2011-12年まで札幌市で続いていたことを小論で明らかにした。

ではなぜこうした2つのグループに傾向的に分かれるのであろうか。これについては、第Ⅳ類・第Ⅴ類が、第2拍の母音の広狭によりアクセントが2グループに明確に分かれ、狭母音は共通語と同じ①で、広母音は方言の②で発音されるということが影響している可能性が考えられる。

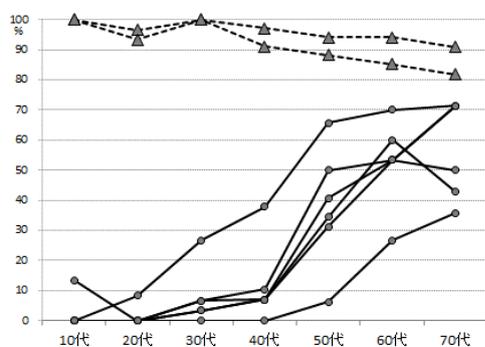


図5 第Ⅳ類w・第Ⅴ類wと第Ⅱ類の「LH (L)」の使用者率（2011-12年調査）

図5は、図1-1として示した2011-12年調査の第Ⅳ類w・第Ⅴ類wの「種」「雨」「窓」「糸」「肩」「鮎」の方言アクセント②の数値（実線）に、第Ⅱ類「歌」「音」の共通語アクセント②の数値（点線）を重ねたものである。

50代以上では第Ⅳ類w・第Ⅴ類wの②がまだ優勢であることがわかる。この年齢層では第Ⅱ類の共通語アクセント②がすでにかなり優勢になっている。共通語の影響もあろうが、第Ⅳ類w・第Ⅴ類wに見られる「第2拍が広母音の場合は②で発音する」というルールがまだかなりの程度残っていることからすると、それが誤って第Ⅱ類にも適用された結果でもある可能性が考えられる。

注1 聞き取りは令和6年度国立国語研究所「共同利用型共同研究(A)」(研究課題「札幌市における音声・アクセントの経年変化に関する調査研究」)による研究助成により2024年に行なった。

注2 国立国語研究所の共同研究プロジェクト「接触方言学による「言語変容類型論」の構築」(リーダー・朝日祥之教授)の一環として行なわれたものである。筆者は「北海道調査班」の共同研究員として本プロジェクトに携わった。調査の企画・実施・分析は朝日祥之氏と筆者とで行なった。

【参考文献】

石垣福雄(1983)『北海道方言辞典』(北海道新聞社)
 尾崎喜光(1987)「社会言語学的アプローチから見る札幌市のアクセントの変遷—名詞篇—」『日本学報』6
 尾崎喜光(1989)「社会言語学的アプローチから見る札幌市のアクセントの変遷—名詞篇(2)—」『日本学報』8
 尾崎喜光(2014)「実時間経年調査から見る北海道のアクセントの動態」(小野米一・菅泰雄・佐々木冠編『北海道方言研究会40周年記念論文集 生活語の世界(北海道方言研究会叢書第6巻)』)
 小野米一(1993)『北海道方言の研究』(学芸図書)
 小野米一(2001)『移住と言語変容—北海道方言の形成と変容—』(溪水社)
 国立国語研究所(1997)『北海道における共通語化と言語生活の実態(中間報告)』非売品報告書